

## 熊野路のニホンミツバチ

誌名	ミツバチ科学 = Honeybee science
ISSN	03882217
巻/号	24
掲載ページ	p. 157-160
発行年月	1981年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



# 熊野路のニホンミツバチ

原 道 徳

## 1. はじめに

紀州熊野は昔から養蜂の盛んな土地である。古くは、家康の子、徳川頼宣は和歌山藩祖として殖産に力を入れ、熊野に養蜂を勧めたことが郡誌にみえている。又、くだって寛政年間に発行の『日本山海名産図会』には蜂蜜の項で、「凡そ蜜を醸する所、諸国皆有、中にも紀州熊野を第一とす……」とある。幻の名著「家蜂畜養記」を書いた久世敦行は、紀州熊野の人である。幕末、明治にかけては、有田郡で貞市右衛門こと蜜市の活躍がすばらしい。

在来種ニホンミツバチの飼育が古くから熊野地方では盛んであったことがわかる。そこで今春、現在どのような状況なのかを調べるために熊野山中5ヶ所(図1)を歩いたので報告する。

## 2. 太古蜜のふるさと

紀伊半島の先端、串本駅から古座川沿いに50km さかのぼる。1日3回運行のバスで2時

間かかる終点が松根である。更に約5 km の山奥、人家のない谷合いが太古蜜のふるさとである。私がここを訪ねたのは東牟婁郡誌(1916年)の記事『本郡養蜂の起源は頗る古く、其何れの時代より始まりしかは記録の存するもの無しと雖、今を距る凡そ千年前、松根の太古と称する戸数兩三戸の部落に於ては野生蜜蜂の醸巣より其貯蜜を採取し、以て他の生活資料と交換せし事は口碑の伝ふる所にして、実に太古蜜の起源なりとす。後人々其有利を覚り、此等野生蜂を捕え木洞に入れ人家の附近に据え置きたるもの漸次分巢増加して山間一般に飼養するに至り、竟に太古蜜の名は熊野蜜に変し大いに世の宣伝を得るに至れり……』による。

松根地区に住む、下村悦一氏と須川寿一氏の案内で太古蜜の場所を訪ねることができた。

郡誌中の3戸とは、村上家、池田家、須川家で、現在は松根地区に移転しており、屋敷跡は

杉の美林となり、わずかに石垣のみが名残りをとどめている。案内の須川寿一氏の話では氏の祖父が大正の初年、東京三越デパートで「太古蜜」を売り出したのがはじまりだと言う。須川養蜂店と書かれた太古蜜のレッテルを最近まで家の中でみかけたとの事。

ここの地名を大河と書いて、タイコと呼んでいるところから、商品名として太古蜜で売り出したものらしい。

下村氏宅の庭先で採蜜方法を再現してもらいながら当地での

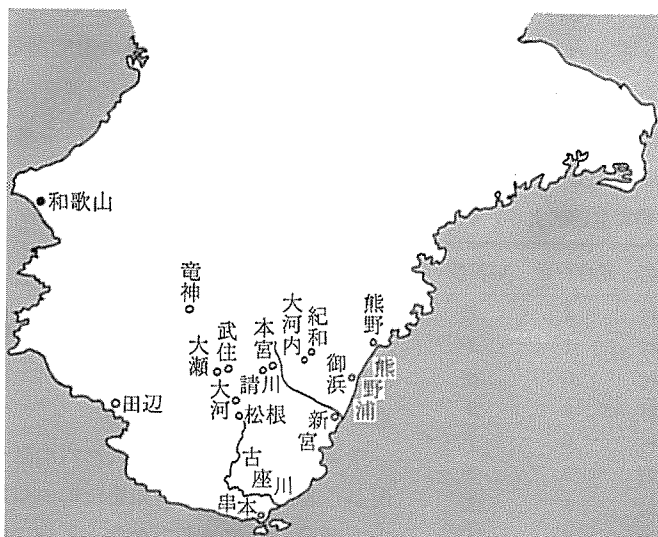


図1 紀州熊野路調査地域図

飼育状況や経験談を聞く。

a. 蜜源は黒木の花が主なもの。黒木とは、この地方でモミ、ツガ、トチ等を総称する名である。熊野は蜜源植物と蜜蜂に適していたのであろうが、最近黒木が伐採され、かわりに杉や桧を植えるため昔のように蜜源がない。

b. 巣箱は杉丸太の空洞をゴウラと呼んで使っている。巣門は2ヶ所、桧は匂いが強く、使用しない。

改良箱は上蓋あきのもの。ゴウラから切り出した巣を竹ヒゴで枠に取りつけておさめる。

c. 採蜜方法はゴウラの天地をひっくりかえす。ゴウラの底の一部に円筒型(径23cm)の筒(図2)をのせる。次にゴウラの側面をコツコツと蜂が上の筒に移動するまでたたく。筒に入った蜂は近くの枝につるす。筒はサクラかケヤキの皮で作られている。巣は約 $\frac{2}{3}$ を切り取る。

d. ゴウラは大きくても、高くてもダメ、径が40~50cm、高さ80cmぐらいが適当。

e. ゴウラの内側には蜜蠟をぬる。

f. 巣門付近を黒くぬるとシシ蜂(スズメバチ)が近よらぬ。

g. 黒木は5年に1度ぐらい良い季節あり。

h. 巣箱の据え場所は南向きの崖上が適。

i. 蜜は巣と一緒につぶしてしぼる。

j. 蜂蜜をアメと呼び、値段は1升15,000円。松根の中垣秀吉氏は明治年間に作った総木製の遠心分離機の珍しいのを今も使っている。

古座川をさかのぼってみて、ニホンミツバチを飼っている家の多いのにびっくりする。

バスの中から見える人家の裏庭には、きまって墓石のような巣箱が据えてあり、帰路120箱

表1 大正11年の飼育状況(紀伊南牟婁郡誌より)

村名	飼育戸数	巣箱数	村名	飼育戸数	巣箱数
北輪内村	5	6	御船村	2	7
南輪内村	10	20	相野谷村	1	3
新鹿村	20	35	尾呂志村	6	8
有井村	35	75	上川村	4	9
神志山村	11	30	西山村	6	7
市木村	16	80	神川村	3	3
阿田和村	4	11	五郷村	4	12
井田村	12	64	飛鳥村	6	14
鶴殿村	1	2	合計	146	386



図2 サクラの皮で作った筒

を数えることができた。古座川沿いは太古蜜のふるさとであり、熊野蜜のふるさとであった。

### 3. 熊浦のニホンミツバチ

文化12年(1816年)大坂屋太助が「蜜蜂養育手引草」を書いている。彼はこれを書くために、わざわざ熊野までやってきたことが、農商務省農書編纂掛がまとめた「本朝農事参考書目」(1886年)にでている。

『野州足利町菓舗、大坂屋太助ガ文化5年紀州熊浦ニ至リ、養蜂ノ法ヲ受ケ、帰家ノ後之ニ従事シテ自得スル所ノ法ヲ記シタルモノ文化12年ノ上木ニ係レリ。……』

彼が養蜂の術を身につけた熊浦とはどこであろうか。熊浦は現在の熊野浦ではなかろうか。新宮市から熊野市へ向う海岸線を熊野浦と言ひ、七里の距離を文字通り七里御浜と呼んでいゝ。大正11年当時、この地方の飼育状況を南牟婁郡誌からひろうと表1の通りである。

ミカンの産地である御浜町は飼育箱数の多かった有井、市木、阿和田の三村合併の町である。そこで役場の産業課を訪ねてみたが、現在、西洋蜂を業者がミカン畑においでいるが、ニホンミツバチを飼っている人を知らぬとの事。

隣町の紀和町役場にはニホンミツバチ飼育届が出ていて、6戸が飼育中とわかったので出かけてみた。

山口光則氏、7群。中野操氏、8群、上馨氏、10群。東兵一郎氏、2群。前憲治氏、1群。計28群。

役場から山ひとつ奥の大河内地区へ出かける。山の急な斜面を背に山口氏と中野氏の家が並んでおり、石垣の先端に15群の巣箱が先方の山に向けて据

えられていた。在宅だった山口，中野両氏に飼育状況を聞く。

- a. 山口家は祖父の代から養蜂をやっている。
- b. 蜜源は黒木，前の山は黒木の原始林。
- c. 巣箱は改良型が主。特長は箱の前後が開閉自由の型。蜜切りに都合良し。
- d. 手で巣をしぼり，カス(蜜蠟)はすてる。蜜の値段は一升20,000円。

外の4戸も飼育方法は同じであった。熊野浦の蜂はミカンの産地，阿和田村を中心に分布していたであろうが，西洋蜂の進出によって，山深い紀和町等の黒木に移ってしまったのであろう。

#### 4. 熊野古道のニホンミツバチ

明治5年，日本政府はオーストリアで開かれた万国博覧会を機会に各種職業の人に教草を編集させ，「教草30巻」を作成させた。農産物30品目を選び，生産工程を初心者に教える図解入りの説明で，一品種一枚のもの。その24枚目が「蜂蜜一覧」である。これは江戸時代までの養蜂術がくわしく記されている。

説明文の終りに「……其蜂を畜養するの法に到りては大抵相同じ，只疎密あるのみ，今出雲国，吉村壽一郎，紀伊国，菊地喜太郎の記する所と諸書に論説……参考しつつ概略を誌む。」とある。

紀伊国，菊地喜太郎とは如何なる人物であろうか。彼が書いたと思われる「蜜の説」なる和綴の本を見ることができた。毛筆で書かれた用紙に「博覧会事務局」の印刷名があるところから「蜂蜜一覧」の原稿であろうか。この「蜜の説」の文中に余話として次の文章が私の目を引いた。

『牟婁郡大瀬村，野嶽村，武住村等の蜜は頗る上品なり。樺，梅，樺類花蕊にて釀成する蜜は冬に至り氷糖の如く凝結す。山に自然に巣を為りたるは，ニガバチ言う大なる蜂来りて蜜を取り去る故多く家に畜うなり。稀に朽木の穴に巣を為たるは熊の採り去る事ありと言う。在田郡にては年々春夏秋と三度截ると言う。熊野にては一度，土用中に截るなり。

右，若山 菊地喜太郎説 』

そこで大瀬，野嶽，武住各村のある本宮町役場でニホンミツバチ飼育者を調べてもらった。

大瀬地区に8戸。仲権吉氏，7群。前久保国一氏，5群。前久保恒一氏，6群。久保増市氏，1群。久保金治氏，3群。笹久保喜一氏，2群。中畑庄一氏，2群。前久保武市氏，2群。計28群。

野嶽は人家3戸のみで飼育者なし。

武住地区は4戸。中峯順治氏，4群。仲章氏，2群。小倉かね氏，1群。蔭地野恒八氏，1群。計8群。

先づ仲権吉氏を訪ねることにした。熊野本宮から紀伊田辺駅まで国鉄バスが1日3回，所要時間4時間かかる中辺路コースの1時間のところに大瀬地区はある。古くから熊野本宮へ通じた熊野古道は山峽を縫うような山深き道であった。山の斜面にへばりつくように家が点在する。仲権吉氏を訪ねて，蜂の管理状況を聞く。

- a. 蜜源は黒木，オオレン，コレン。
- b. 丸太の空洞(ウト)と改良箱。ウトの内側は黒く焼く(図3)。
- c. 巢門は3カ所。コーシアナ(腰穴)と言う正方形(1cm角)の穴が巢門の約10cm上部にあげてある。
- d. 採蜜の方法はウトをひっくりかえして底面から天井まで $\frac{2}{3}$ を切り取る。
- e. 切り取った巣はスイノウの上に布をしいてタレ蜜をつくる。
- f. 採蜜は年1回，土用の日のみ。
- g. 巢虫は熱湯で殺す。
- h. 蜂蜜(アメ)は1升が30,000円。

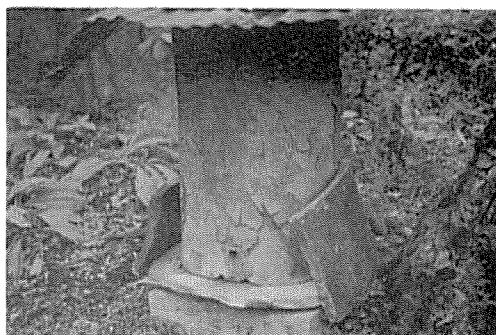


図3 コーシアナ(腰穴)のあるウト(巣箱)

今年冬の寒さで多くの蜂が死んだが、又ふえるだろう。春になると待ウトを蜂の通り道にしかけるのだと言う。どの家も4~5個の待ウト(予備の巣箱)を持っている。全戸数14戸の内、8戸が蜂を飼っている。

バスが来るのに間があったので、訪ねそこねた本宮町請川地区の山本米蔵氏に電話で、ニホンミツバチ20箱の飼育状況を聞く。

- a. 巣箱はウトと呼び、材質は杉か栂。巢門は2カ所とミツウメと称する穴があって合計3カ所。
- b. 蜜のしぼり方はダル(桶)にアミをかけて自然に蜜をたれさせる。
- c. 蜜源は黒木。
- d. 蜂蜜はアメと呼び、1升が20,000円。

翌日、紀伊田辺駅へ出て、竜神村大垣内(オオガイド)を訪ねた。日高川の上流、加茂瀬橋バス停近く、手谷正雄氏は7箱のニホンミツバチを祖父の代から飼っておられる。ここは少し変わった飼い方をしていた。巣箱は自然木をくりぬいたものだが、前方を約20cm切り開いてそれが蓋になっている。(図4)

巣箱は縁の下に下駄箱のようにはめこまれている。巣箱はゴウラと呼び、材質は栂。採蜜は夜中にする。蜂をボロ布をいぶして奥へ追いやり、巢の $\frac{2}{3}$ を切り取ると言う。

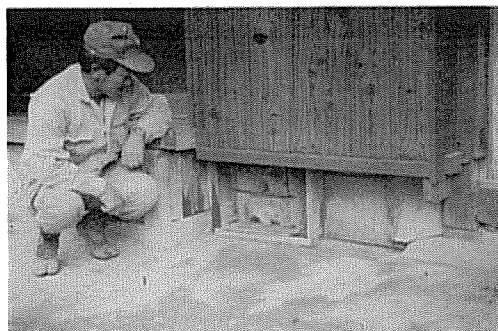


図4 縁の下にはめこまれたゴウラ(巣箱)

表2 現在の飼育状況

項目	松根地区	大河内地区	大瀬地区	請川地区	竜神村地区
蜜源	黒木(モミ、ツガ、トチ)	黒木	黒木(オオレン、コレン)	黒木(オオレン)	黒木
巣箱の名称	ゴウラ	ゴウラ	ウト	ウト	ゴウラ
採蜜方法	果をつぶしてしぼる	手でしぼる	自然にスイノウでタレさせる	果をアミにのせて自然に	自然のタレ蜜
特色	サクラの皮で作った円筒型に蜂を移して蜜切りをする	改良巣箱は前面、後面が取りはずしができる	ウトの中を黒く焼く。コーシアナ(腰穴)が巢門の上部にあけてある	巢門の外にミツウメと言う穴がある	巣箱が縁の下にはめこまれている

## 5. おわりに

熊野路はすべて、本宮を中心に放射線状に海岸にのびた山道であった。山深く、黒木の原始林による蜜源が熊野蜜の品位と飼育を助けていたのであろう。西洋蜜蜂の盛んな現在でもかたくなにニホンミツバチを飼いつづけているのは何んであろうか。あきらめが早く、すぐに巣箱を捨てて逃げ出す、きまぐれニホンミツバチに待ウトを作って、気が向いたら帰っておいでの気の長い姿勢はどの地区でも感じられた。それを放任養蜂と言うかも知れぬが私は愛情養蜂だと思う。飼う人の心に昔ながらの伝統を守る根強さが現われている。

各地区ごとにすこしずつ違いがあるのでまとめて表2を作ってみた。西洋蜂に追いあげられ、黒木の原始林は切りたおされ、あかるい話題はないが、熊野路のニホンミツバチよ、健在であれと祈らずにはおれなかった。

(〒838-13 福岡県朝倉郡朝倉町 藤井養蜂場内)

## 主な参考文献

- 紀伊南牟婁郡教育会. 1923. 紀伊南牟婁郡誌下巻.  
 木村孔恭. 1799. 日本山海名産図会.  
 紀伊東牟婁郡役所. 1916. 紀伊東牟婁郡誌.  
 田中芳男. 1872. 教草24巻「蜂蜜一覽」.  
 著者不明. 1872. 蜜の説.

HARA, MICHINORI. Japanese honeybees in "Kumano-ji" (Wakayama Pref.). *Honeybee Science* (1981) 2(4)157-160. Asakura-cho, Asakura-gun, Fukuoka-ken, 838-13 Japan.